

夢に導かれる生

|       |                                  |
|-------|----------------------------------|
| 奨励    | 崔 弘徳〔ちえ・ほんどく〕                    |
| 奨励者紹介 | 同志社大学神学部嘱託講師<br>日本キリスト教団天満教会協力牧師 |

主は、ロトが別れて行った後、アブラムに言われた。  
「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数えきれないであろう。さあ、この土地を縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与えるから。」  
アブラムは天幕を移し、ヘブロンにあるマムレの榎の木のところに来て住み、そこに主のために祭壇を築いた。

（創世記 13章14―18節）

未来に開かれた存在

哲学者M・ハイデッガー（Martin Heidegger;1889―1976）は人間を「死への存在」（Sein zum Tode）と規定しました。人間実存そのものを考えるならば、こういった言い方はある面では当てはまると言えるでしょう。しかし、人間存在やその生の意味などを考え合わせるならば、この言葉はただ絶望的であり、虚無主義的であると言わざるをえません。こうした考え方では、われわれに夢と希望といったものを示してくれないからです。つまり、この言い方では単に人間は誰でも死んでしまう存在であり、死ぬことによってすべてが無になってしまうということしか示してくれないからです。

しかし、聖書の教えによれば、人間は決してそのような存在ではありません。神学者W・パネンバルク（Wolfhart Pannenberg;1928―2014）は、人間を「世界開放性」（Weltoffenheit）の存在、特に将来への開放性を有している存在であると規定しました。究極的には、世界の彼方へと開かれた存在です。ここで規定される人間は、希望を特質とします。キリスト教信仰に照らし合わせるなら、パネンバルクの言葉どおり、人間というのは未来に向けて希望をもって生きていく存在です。つまり、人間は希望の存在で、常に夢を抱いて歩んでいく存在なのです。これに関して、今日の聖書箇所に見れている御言葉を通し、いっそう具体的に吟味してみたいと思います。

神様から与えられた夢

創世記13章の文章に照らしてみるなら、アブラハム（この13章には改名以前のアブラムになっている）は、自分の甥であるロトと同じ地域と一緒に暮らしてきましたが、両者の財産や率いている構成員が増えるにつれ、彼らの間にはさまざまな葛藤や争い等が生じるようになりました。そこでアブラハムは、ロトにお互い別れて暮らすことを勧めると同時に、先にロトが好きなところを選ぶことを許しました。そうしてロトは、非常に豊かであろうとみられる地域を先に選んでそこへと向かったのです。それに対して、残されたアブラハムには特に目ぼしい地域がなかったようです。つまり、どこへ行って暮らしたら良いのかわからないほど、極めて不安を抱いていたのではないかと考えられます。創世記13章に描写されたアブラハムの特徴を描くならば、全く希望のない様子、頭を落として何を考えてもなかなか答えが出せず、どうしたら良いのか感づいている様子に見受けられます。そういった、いわば絶望の状態に陥っているアブラハムに神様が現れ、話しかける場面から今日の聖書箇所は始まります。神様は、アブラハムに「目を上げて・・・東西南北を見渡しなさい」と言われました。

これは言い換えるならば、「夢をもちなさい」という意味であると受け止めることができます。すなわち「落胆し絶望してはならない。わたしがあなたに希望を与える。目を大きく開いて遠く広く眺めなさい。あなたの目に入るすべての土地をあなたに与える」と、約束をしてくださっているのです。この神様の御言葉からわかるのは、もともと夢というのは神様から与えられるものだということです。根本的なことを申しあげますと、ここで言われているのは、夢における主体は人間でなく神様ご自身であるという意味です。そのことを敷衍（ふえん）するなら、夢は人間が生来的に有しているものでもなければ、自分の知恵や能力によってもちうるものでもありません。夢は全く神様から、つまり、外から与えられるものなのです。もちろん、生まれつき夢をもっている場合もあるでしょうが、あくまでもそれは神様から与えられた一種の賜物なのです。

新約聖書のフィリピの信徒への手紙2章13節には、次のように記されております。「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです」。すなわち、神様こそがわれわれに夢をもつようにしてくださるし、またそれを成し遂げていくように導いてくださるのです（詩編37編4節参照）。ですから、われわれはその夢を見だし、抱き、その夢に導かれる生を生くることに努めるべきなのです。ここで注意すべきは、真の夢と欲望は区別されるということです。すなわち、夢が神様から与えられたものであるならば、欲望は人間の内在的なものであると言えます。とりわけ、真の夢は神様に根拠をもつものですから、あくまでも夢とは究極的には神様の栄光のためのもの、すなわち神様と共同の善をなすためのものと言えるのです。それゆえに、その夢を実現するプロセスにおいて神様の助けを求めるだけでなく、その夢が実現された後でも傲慢に陥らず神様の御心に従って生き続けることが必要なのです。

夢に導かれるべき生

何よりも重要なのは、神様がわれわれの一人ひとりに与えてくださった夢を見いだすことです。そこから夢に導かれるわれわれの生が始まります。すなわち、夢をもつと、ただ現実的な生に捕らわれて生きるのではなく、果敢に未来に向けて希望のなかで生きることができるのです。

われわれが夢を見だし、それを抱いて生きるためには、まず「目を上げて」現状を越えた世界や未来に目を向ける必要があります。英語でそれを表現するならビジョン（vision）という言葉になります。この言葉はラテン語のヴィシオー（visio）から由来したものです。つまり「見ること」、すなわち現実の時空を越えた世界や未来、つまり「東西南北を見渡す」ことから、われわれの内に与えられている夢を意識し始めるのです。神様はアブラハムに「見える限りのもの」を与えると約束されました。そして、その約束は同様にわれわれにとってもなされたのです。ですから、われわれはできる限り高く、遠くを見渡さなければなりません。ただ、この「見渡す」ことにおいてわれわれの能力だけでは限界があります。つまり、「神の国」という究極的な希望を抱かせる聖霊の力によってはじめて、われわれは終末的な希望だけでなく、歴史における将来的な希望をもつことができるのです。この終末的な希望のなかでより大きな歴史内在的夢を見いだすこと、これこそまさに神様の御心であり、御望みではないでしょうか。

しかし、目を上げて未来を見渡すことは、誰にでも容易なものではありません。ある人は次のように言います、「私はどうしても未来を見渡すことができません。夢を見いだすことができません。なぜなら、私はさまざまな困難にさらされており、それを解決するだけでも精一杯なんですから」と。しかし、そういう人こそ神様がアブラハムに言われる内容をよく聴く必要があるでしょう。「あなたがいる場所から目を上げて・・・」。われわれはどんな人であっても、どういう状況にあっても、今置かれた状態から、今いる場所で目を大きく開いて未来を見渡すべきなのです。

大体20年前のことですが、私は韓国のある田舎で牧会活動をしていました。そこにいたある信徒さんが雉（きじ）を飼育していたんです。ある日、私はその信徒さんに聞きました。「雉は野生動物だと思うのですが、どうすれば家でも飼育することができますか」と。その彼の答えが面白かったんです。雉を捕らえてきて、その雉の目の前に三角形のプラスチックを逆に差し込んでおくと、雉は目が見えなくなってしまう、そうすると飛んでいくことができなくなるとのことでした。前方が見えるなら飛んでいくことができますが、両サイドしか見えない雉は、ただフラフラと歩き回るだけになります。その時、私は一つの重要な教えに気づいたのです。われわれが夢を見いだすことができない理由は、われわれの目の前にプラスチックのようなものが差し込まれて、前方が全く見えないからだということです。そのプラスチックとは、言うならばコンプレックスのようなもので、「私は良くない家庭環境の中にいる」、「私はお金が豊かでない状態である」、「私の頭は良くない」、「私は身体的なハンディキャップをもっている」、「私はもう歳をとっている」などです。こうしたいろいろな理由は、われわれが未来を見渡すことができないようにしてしまうのです。その結果、われわれは未来に向けて遠く飛んでいくこともできなくなってしまうのです。それゆえに、われわれは思い切って自分の目の前に差し込まれているプラスチックのようなものが何なのかに気づき、それを外し、遠く投げつけ、それから目を上げて未来を見渡さなければなりません。そのときにこそ夢が現れます。夢が見えてきます。そのときはじめて、夢がわれわれの人生を導く力となり、その夢によって導かれる生を生くることができるのです。

夢の実現における  
人間の努力と神様の介入

神様は、アブラハムにその見える土地を「縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与える」と言われました。つまり、自分の足で直接踏むようになったすべての土地を与えるという意味です。ここから考えられるのは、その見えるものを実際に自分のものにするためには、すなわち夢を実現させるためには、それが必ず現実のものとなるという強い意志をもって、一生懸命努力していかなければならないということです。もちろん、こうした信念や行動力は、神様が与えてくださった夢を神様が必ず成就してくださるという、神様の約束への固い信仰に基づくものです。神様の約束とは、常にわれわれの認識能力や判断能力を超えたものと言えます。それゆえに、われわれは未来へのビジョンをイメージ化するなかで、それを自分のものにするために汗を流しながら頑張っていくべきなのです。聖書の箇所からすれば、アブラハムも自分の天幕をヘブロンへと移しました。これはまさに、見える土地を「縦横に歩き回る」ために踏み出した行動の第一歩であると言えるでしょう。それ以降、アブラハムはだんだんと自分の足で世界を広げていきました。

こうしたビジョンをもち、それから夢を成し遂げるため行動していくことには、忍耐や冒険などを伴った最善を尽くす精神と姿勢が必要となります。何の努力もせずに夢が実現されることを願うなら、それはただ空想にすぎないし、結果的には幻に終わってしまうでしょう。神様も「縦横に歩き回るがよい」と言われております。すなわち、われわれには歩き回る努力が求められているのです。

しかしながら、いつまで忍耐をもって歩き回ったらよいのか、われわれとしてはよく分からない場合があります。われわれの計算以上に長い期間がかかる場合もあります。さらに

は、思いもしなかった良くない状況に見舞われ、その夢の実現がいつそう遅くなってしまうか、あるいは夢の実現を断念してしまう場合もあります。殊に、夢の実現を諦めてしまうことは、まさに夢そのものが神様から由来したものであり、その夢を成し遂げること自体が、一つの大きな使命であるということを忘れてしまった結果と言えるでしょう。神様から与えられた真の夢を抱いている人は、どういう状況に遭っても決してそれに屈せず、その夢を成し遂げるための一貫した生を生きていきます。そうした精神と姿勢をイエス・キリストの生涯から見いだすことができます。イエス・キリストには最大の夢（使命）がありました。それは十字架につけられ死ぬことにより、人類の罪を贖（あがな）うことです。しかるに、それを成し遂げるためにはエルサレムに上（のぼ）っていかねばなりませんでした。エルサレムにはイエス・キリストに対する多くの敵対者たちがイエス・キリストを殺すために待っていました。人間的に考えるならば、極めて怖い状況であります。それにもかかわらず、イエス・キリストは人類の救済という最大の夢を成し遂げるために、堂々とエルサレムに向かって歩んで行かれました（マタイによる福音書16章21節以下参照）。どうすれば夢の実現に向けた生を貫くことができるでしょうか。それは徹底的に神様を信頼する信仰です。イエス・キリストは、常に「父なる神と一つである」（ヨハネによる福音書10章30節）という強い意識をもっておられました。今日の聖書箇所を見ると、アブラハムはヘブロン地域に移って神様に祭壇を築いたことが記されています。そこでわれわれは、アブラハムにとっては神様への信仰が中心となっていたということが読み取れるのです。

このような一貫した生には、自分の生涯や歴史のなかに神様が介入してこられるという確信が横たわっています。したがって、われわれの力や努力だけで夢を実現することができるという誤解に陥ってはなりません。むしろ、神様が超自然的・超歴史的に介入してこられることによって実現されるのです。われわれが未来に向けて「東西南北」を見渡し、またそこを縦横に歩き回することは当然のことですが、その根底には神様の介入を認め、また、期待する信仰をもっていなければなりません。神様の働きによって、われわれが抱いている夢がそのまま実現されるだけでなく、われわれが考えていた夢以上のものが叶えられる場合もあるし、あるいは、われわれが抱いていた夢とは違う、ある面ではいっそう素晴らしいものが実現される場合もあるのです。

## 結びに代えて

ここで一つの面白い笑話を紹介したいと思います。カシコとオロカという友人がおりました。カシコは賢くて勉強もよくできる人ですが、それに対してオロカは何かと要領が悪く勉強も上手くできない人でした。何でもかんでもカシコを真似しようとするオロカは、大きな夢をもってカシコと共にある企業の採用試験に応募したのです。面接の日、カシコが先に面接を受けました。面接官にカシコは「24番カシコです」と自分を紹介しました。そこで面接官は「ようこそ」と言い、いくつか質問を始めました。「サッカー選手は誰が好きですか」。「はい、昔は本田が好きでしたが、今は香川が好きです」。「それではユーフォー（UF0）の存在を信じますか」。「はい、科学的には証明されていませんが、私は存在すると確信してます」。「では、宗教改革はいつ行われましたか」。「はい、16世紀です」。それで面接が終わり、カシコは面接室から出てきました。するとオロカはカシコに駆け寄り、どうい質問をされたのかをいろいろと聞きだそうとしたのです。オロカはカシコから聞きだした質問内容に従って答えを考え、自分の順番になるまで最善を尽くして、繰り返し繰り返し暗記する努力をしました。そうしてついにオロカの番が回ってきたのです。オロカは面接室に入り座りましたが、いきなり「24番です」と自分の受験番号でなくカシコの受験番号を言っていました。24番の面接はすでに過ぎていましたので、面接官はおかしいなと思い、「あなたの名前は何ですか」と聞きました。そうするとオロカは、「はい、昔は本田だったんですが、今は香川です」と答えたのです。さらに奇妙に感じた面接官は、「あなたはバカですか」と聞くと、オロカは「はい、科学的には証明されていませんが、私はそうだと確信してます」と答えました。面接官はオロカのことを正気でない、気の毒な人だと思い、「いつからそのようになりましたか」と聞くと、それに対してオロカは「はい、16世紀からです」と答えたのです。こうしたオロカのやり取りを見ると、誰もがオロカの面接は失敗に終わったと思うことでしょう。しかし、そこに思いがけないことが起こったのです。カシコはもちろんのこと、オロカまでが合格したのです。その会社は、新たな時代に対応していくため、最近方針を転換し、賢い人だけを雇うのではなく、他の方面で才能をもっていそうな人材を積極的に採用することに決めていたのです。カシコは成績優秀なその知性を買われて合格したのですが、反対にオロカはその面白さを買われ採用されたのです。審査委員会ではオロカのような人が入社すると会社の雰囲気がいっそう明るくなり、それで皆が楽しく働けるのではないかという判断がなされたようです。

2012年9月26日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録